

一度は見ておきたい重要文化財/石塔シリーズ

奈良の旅編
その4



今回は「一度は見ておきたい重要文化財/石塔シリーズ・奈良の旅編 その4」と題し、歴史的価値、学術的価値の高い石仏や石塔をご紹介します、その魅力に迫っていきます。

観光情報も添えていますので、ぜひ実際に足を運んでいただき、その雰囲気を感じ、目で愉しみ、心で歴史に触れてみてはいかがでしょうか？

長岳寺五輪塔(奈良県天理市柳本町)

長岳寺(ちょうがくじ)は、奈良県天理市にある高野山真言宗の寺院です。阿弥陀如来を本尊とし、淳和天皇の勅願により天長元年(824年)に空海(弘法大師)によって開かれたとされています。

大門をくぐってすぐ右手に進むと五輪塔群が見えてきます。その中央に立っている五輪塔を今回は紹介いたします。



特徴



長岳寺五輪塔は、花崗岩製で高さは約206cmです。一段切石の基壇上に、大和式の複弁反花座を置き、その上に据えられています。

複弁反花座とは、中央の隆起部分で二分されている下向きの蓮の花びらが刻まれた台座のこと。地域や時代によって特徴が出る部分でもあります。

中央から左右に少し流れるように優美に蓮の花びらが細工され、その膨らみに豊かさがあるのが大和式の特徴です。

複弁反花座の上には、方形の請座と呼ばれる台座が設けられており、これも「大和形式の複弁反花座」の特徴となっています。

では、五輪塔の特徴を上から順に見ていきましょう。

〈空輪・風輪〉一石でつくられ、空輪は宝珠の形をしています。

〈水輪〉ほぼ球形です。洗練された形をしています。

〈火輪〉軒の先端は厚く作られ、また軒反は力強くなっています。

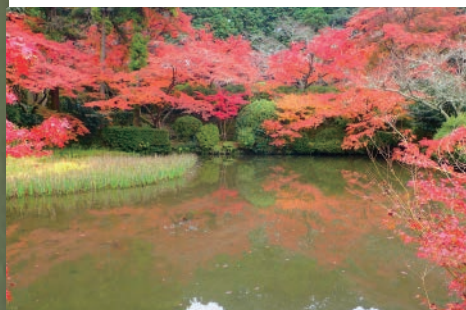
〈地輪〉四面とも無地で、四門の梵字や刻銘はありません。

歴史

長岳寺五輪塔群の中央にある五輪塔は鎌倉時代後期に建てられたものです。それ以外にも鎌倉時代後期～南北朝時代の五輪等や宝篋印塔が建ち並びます。

長岳寺は戦国時代の文亀3年(1503年)に兵火により消失、以降も境内の東にある竜王山に居城を構えていた十市氏(とおちし)と松永弾正との合戦の主戦場になるなど、度重なる兵火により建物が焼失します。さらには、豊臣秀吉の寺社統治政策による寺領の没収、明治期の廃仏毀釈などの困難がありました。民間による大師信仰に支えられ復興し今日に至っています。

鎌倉時代から残る五輪塔群は、幾多の栄枯盛衰を見届け、時代の息吹を今に伝えます。



周辺の観光情報

長岳寺は有数の紅葉スポットとして知られ、全国紅葉100選にも選ばれている地です。自然に包まれた約10200平方メートルの境内では、例年11月中旬からモミジやカエデ

などの木々が色付き、11月下旬頃まで美しい紅葉を眺めることができます。中でも本堂からの眺望が一番素晴らしいです。

日本最古の玉眼仏阿弥陀三尊像、鐘楼門などの重要文化財を有する寺院でもあります。「歴史に想いを馳せ、美しい紅葉を眺める」。そんな大人な秋のひとつときをぜひ過ごしてみたいはいかがでしょうか。



交通アクセス

- 〈鉄道〉 JR桜井線柳本駅下車、東へ徒歩20分
- 〈バス〉 近鉄天理駅から桜井方面行きに乗車、または近鉄桜井駅から天理方面行きに乗車 上長岡(かみなんか)停留所下車 東へ徒歩5分
- 〈自動車〉 西名阪自動車道「天理IC」から 国道169号経由で約15分



まとめ

建てるに亡くなった人はみな最高の位と最高の世界へ往けるとされ、今日まで宗派を問わず、「ありがたい最高のお墓」とされている「五輪塔」。

その大きさには、時に故人を想う気持ちが反映され、また、兵火や困難がある

うとも、「次世代に受け継いでいこう」という想いが繋がることで、今も当時の面影を残しています。故人を仏様とし、極楽往生を叶える五輪塔。

今回ご紹介したスポットにぜひ一度訪れて、体感してみてください。